
男子高生のつくりかた

乙木ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男子高生のつくりかた

【NZコード】

N3045Y

【作者名】

乙木ありす

【あらすじ】

吉元真^{よしあもとまこと}は自分の立場に常々不満を抱いていた。

なんで女に生まれたんだろう。女なんてつまらない

そんな彼女が17の夏に決行したのは「男のフリして一人旅大作戦」やりたい放題やって一生の思い出にしようと思っていたのに、いつの間にかとある組織の犯罪に巻き込まれたり、初対面のお兄ちゃんにさらわれたり・・・。

文字通り一生の思い出となる、少女の一週間の物語です。

現在ケータイ小説サイト「野いちご」にも掲載中です。

男に・・・（前書き）

一人称の小説に、チャレンジするつもりで書き始めました。
中編ものになる予定で、書き上がつたら投稿してみたいなと思つて
います。

ですのでできましたら、おかしな所などじょんじょんご指摘いただ
けると助かります！

最後まで書ききれるよう頑張りますので、お付き合つてよろしくお願
いいたします。

男に・・・

ガタンゴトン ガタンゴトン

やつと馴染んできた揺れがふとなくなつた頃。
私 いや、今日から私はしばらく俺なのだ。
俺はゆつくりとまぶたを開いた。

腕時計を見ると現在午前1時58分。
随分眠つたと思っていたけど、大した時間は経つていなかつたよう
だ。

この夜行列車「ムーンライトながら」は全席指定席なのだが、車内
が閑散としているせいいかみんな勝手に席を選んでいるのだろう。
ボックス席せんぶ占領して、荷物やら足やらを座席に乗せている。
うつむいたり、丸くなったり格好は様々だが、とりあえず俺から見
える範囲の人はみんな眠つてゐるようだつた。

「ふあ・・・」

大きく伸びをして、物音を立てないように席を立つ。
室内は薄明るいのに、物音ひとつしないこの空間はかなり不気味だ。

(・・・にしても)

無茶なことを考えたものだと、今更ながら自分の単純な思い付きを
笑つてしまつ。ことの発端は・・・といつても大したことじやない。
本当はずつと不満に思つていたことだ。

俺の名前は吉元 真、17歳。県内の公立高校に通うれつとした
“女子”高生だ。

ある日の昼休み、食事が済んだあと中庭でバドミントンをしていた
時のこと・・・

木に羽が引っかかってしまい、俺は本領発揮といわんばかりに木に
よじ登り羽を取ろうとした。

ところがそれを見ていた現国担当の鈴木先生がこう言つたのだ。

「女の子が、そんなことするのはよしなさい。下着が見えるわよ」

つて。まるで頭を殴られたようなショックだった。

鈴木先生は人気のあるおばちゃん先生で、俺もファンの一人だった。生徒ひとりひとりと向き合ってくれて、先生だけはそんなこと言わない人だと思つてたのに・・・

けどその瞬間、怒りや悲しみの感情が湧くこともなく、逆に頭の中から何ががスーっと引いていくのを感じた。

今までずーっと、「なんで男はよくて女はダメなの?」とか「男ばかりがつかりする」とか頭に来てたことが、急にバカラしくなってしまった。

だって鈴木先生でさえこんなことを言うのならきっと、俺が女に生まれた限りずっとこんなことが続くんだとわかつてしまつたから。そこでなんかふと、ふつきたというか・・・俺の中で答えがクリアになつたんだ。

男になんなきやだめだつて。

そこで！

思いついたのがこの『ザ・男になつて、青春18切符で一人旅！』だった。

地元じゃ男のフリしたってバレちゃうし、まず家族に止められる。けど、俺は別に女の子が好きだとかそういう方面で男になりたいわけではないので、ちょっととの間氣分を味わつて気晴らしきれればいい。

そういう理由から、この計画は非常に有効なものだと思われた。

（青春18切符なら高校生のお財布にも優しいし）

親には親友と旅行に行くと言つてあるし、その親友にも口裏合わせを頼んである。

親友の名は浅田涼香。

涼香とは高校一年の時からの友達で、俺が常々「女であること」に対するぐちぐち不満を漏らしていることをとを知つていた。

計画について相談すると、最初は「危ないから」と反対してたけど、バドミントン事件の時も一緒にいたし、何度も食い下がると「これつきりだからね」としぶしぶ協力してくれたのだ。

涼香は優等生だし、うちにも何度か遊びに来てるから、両親からはすんなり許可をもらえたつてわけ。

それから、中二の弟に適当な（文化祭の出し物で使つだなんだ）理由をつけて服や小物を巻き上げたりと準備をして、とうとう今日といつ日を迎えることができたのだが。

いざ一人でこんな夜行列車になんか乗つてみると、急に心細くなつたりして・・・

（いいや、しつかりしる。まだ始まつたばっかりじゃんか！　この旅行の間は男でいるつて決めたんだろ！？）

だいたい本当の男だつたらこれくらいの状況、怖いわけがない。

がらがら ガラ～つ

自分で自分を奮い立たせて、トイレへ向かう扉を開ける。
間延びした扉の開閉音が、また俺のテンションの足を引つ張りつとしたその瞬間

(うおーー)

ドアの死角部分に、張り付くように立っている男の存在が俺を驚かせた。

その男は中肉中背、ガムをくしゃくしゃやりながらゆつくりとやらを振り返る。

(ひいー)

ちよつと止めてよ、そんな振り返り方、不気味だつて！

俺は悲鳴を上げやうになりながらも、なんとか飲み込むことに成功した。

見ていいんだが、見ないほうがいいんだが、まじつていてると

「おめえも若いのに、大変だなあ～」

いかにも頭の悪やうなれつで、男が話しかけてきた。

「？」

夏なのに長袖ジーパン。

茶色のキャスケット帽からはパサついた金色の短髪が数束こぼれているこの男。

見た目で人を判断してはいけないといわれているが、とても直視していく気持のいい対象ではない。

あんまり夜行列車に乗るタイプには見えないし、こんなところで無賃乗車でもしようとしてるんだろうか・・・

「・・・・・」

いやいや、こんな風に見えても案外鉄つちゃんと、線路をがたがた走るこのノイズすら愛しく感じているのかもしねり。

・・・なんて勝手に想像していると

「んで~、おめえ 席は?」

「え?」

「せきは、どこだつて聞いてんだ」

「せき?」

男は続けて質問を投げかけてきて、つい反射的に聞き返してしまつ。ただでさえ電車の中、滑舌の悪い男がガムを噛みながらだからなあさら何を言つてているのか聞き取りづらい。

「席だよ! どこなんだ! ?」

「じ、11 Aだけど」

「11 Aか」

突如語氣の荒くなつた男にびびつて反射的に答えると、男は満足そうに笑みを浮かべた。

「便所は左側だぜ。ほづず」

「はあ・・・」

何だかわけがわからなかつたが、ほづずと言われたことが妙に嬉しくて俺もへらりと愛想笑いを残し男の横をすり抜けた。

ひょっとしたらただの気さくなあんちゃんのかもしないし、案外男同士だこんな風に初対面でもしゃべるのかもしない。

けどやつぱりもう一度男を振り返る勇気はなかつたので、そのままトイレの扉を開けた。

すると・・・

「お」

洗面台の上にある、一枚のカードが目に留まる。

とりあえず用を済ませて手を洗つてから、そのカードを拾い上げた。

(Succaじゅん。誰かの落とし物かな?)

それはJRで発行してゐる電子カードで、俺も普段は定期券として使つてゐる。

ただ俺のと違つてこのSuccaは無記名だった。

無記名だから落とし主は特定しづらいかも知れないけど、入つてる金額によつてはかなり困るに違いない。

(じゅー、駅員さんにでも・・・)

渡そつか。とドアを開けると

ぐりつ

止まっていた列車が発進したらしく、大きく体が傾いた。

「おひと」

逆側の壁に手をつくと同時に、反対の手でうぶさをポケットに押し込む。

捨い物を落つことしきやめずこもんね。

ついでにちらりと車両側の扉へ目をやると、その場所に例の男は立つていなかつた。

入れ替わりにつつて変わったハンサムな兄ちゃんが立つていて、ほつと胸をなでおろす。

いやー、やっぱ不気味じやん。

見た目で判断しちゃいけないんだるーけど、見て気持ちのいいものとよくなきものがある。

が、

(ひらひー)

ほつとしたのもつかの間、その兄ちゃんがすんじゃ顔でしつらを見ていることに気が付いて、俺は体をこわざります。

「おこーお前・・・」

兄ちゃんはしつらを見据えたまま、ずんずん近づいてくるところなり俺の胸ぐらをつかみ上げた。

「！！」

「誰に頼まれた！？」

（はあ？？）

「くそっ、まさかこんなガキだとは……。
「なに……うべつ」

兄ちゃんたと俺、かなりの体格差なのにその力加減は容赦ない。服で首が絞まって、本気で苦しい。

「誰に頼まれたかって聞いてんだよ……ビijoで受け取った！？」

だから……

「ぐぐぐ……」

「ぐ？ お前ふざけてんのか」

だから苦しいって！ こんな状況で口なんかきけるか――――――
思いつきり怒鳴つてやりたかったけど、それすら声にならない。
それどころかなんか田の前がかすんできて……これはかなりやば
い。

「う・・・ぐうー」

「うげつー」

一か八か、薄れゆく意識の中俺は思い切り足を蹴り上げた。
狙いを定める余裕はなかつたけど、すねが男のどこかに当たると、
うめき声とともに男の手が離れる。

「う・・・げほり、『ひまつ』」

俺もやつと解放されてせき込みながら、壁に背をもたせかけた。

・・・本当に、一体なんなんだ？

俺が知らなかつただけで、男つてこんななの？

けどそれもどうよ。いくら男つつたつて、いきなり取つ組み合つなんてことは・・・

ちょっとばかしハンサムだつたところで油断しちゃいけないんだ。夜行列車は大勢の乗客が利用しているポピュラーな交通手段だと思つてたけど、昼と夜とでこんなに違うなんて・・・

とにかくデッキは危険だと、車両ドアに手をかけるが兄ちゃんがしつこく食い下がる。

「おいら待て！ こんなことしてただで済むと思つてんのか

「お前が悪いんだろ！ 大体何なんだよ、わけわかんねー！ てか

触んな！」

「でかい声出すな！ しらばっくれてねえで白状した方がお前のためだ！ 運び屋なんてやつとこてそのままとんずらができると思つてんのかよー？」

「あ？ 運び屋？ 俺が何を運んでるつていうんだ？」

「！ このバカ・・・！」

ちつ、と舌打ちするとそいつは少しだけ、掴んでいた手を緩めて俺の方へ向き直つた。

(・・・・・?)

こうして正面から向き合ってみると、顔つきは至つてまじめで、いきなり他人に暴力をふるつような男にはとても見えなかつた。

薄い一重に、通つた鼻筋。

黒い髪に同じ色のきりつとした眉毛。右目の中には小さなほくろがあつて、そこはかとない色気が漂つている。

・・・服装は茶系のTシャツにジーンズと地味目だが、純和風のイケメンだ。

風貌のせいか、まじめな雰囲気のせいか、あんなことされたのについ素直に話を聞いてしまつ。

「・・・駅で荷物から離れた時間があつたか？」

「？・・・いや、ずっと、持つてたけど」

俺の持つてきた荷物はふたつ。着替えなどが入つたボストンバッグと、貴重品の入つたメッシュセンジャーバッグ。ボストンバッグに大事なものは特に入つていなかつたけど、服とか借り物だし一応目からは離さなかつた。

「複数の人間に話しかけられたことは？」

「いや・・・」

「居眠りは？」

ぎくり

“ した”と答える前に身じろいで、俺は質問を否定していた。

「寝たのか・・・？」

うつ

「うん・・・」

はあー、とため息をつく兄ちゃん。

そんな態度をとられると俺が悪いことしたみたいだけど、夜行列車
だぜ？

寝るのふつーだろ??

「どうせ荷物を手離して寝てたんだろ?..」

「そりゃ」

そりゃあ網棚に乗せてあつたよ！

座席に荷物おきっぱの人もいたけど、夜行列車初心者の俺としては
万一隣の座席に予約が入つてたらと思って、ボストンバッグの方だけ
棚にのせていたのだ。

男に・・・ 4

「つづたく、変なと」で氣が小さいんだな。・・・ 来い」

「えつ」

兄ちゃんはそのままどこきなり俺の腕を掴み元来た車両へ向かう。

「席は？」

「11 A . . .

「11 . . .」

意図はわからなかつたけれど、勢いに圧倒され大人しくついていく。

「11 Aだな？」

「うん。いい . . .」

就寝中の乗客に配慮して小声で返事をする。

が、

「あつ、無いー。」
「しいつ」

兄ちゃんが鋭く囁か、俺は慌てて口を手で押された。
でも、でもそー・無こよー・無くなつてるー

「俺の荷物が…・・・」

「わかつたら」
「うちだ」

「でも、え?」

ひょっとしたら何かの間違いでどつかに転がってるんじゃないのか。
探さなきゃ という俺の思いとは裏腹に兄ちゃんは俺の腕をつかみ、
強引に車両を出す。

「尼川、九五」

それだけでも驚いてるのに腕を引く勢いは止まらず、デッキ・トイ
レを超えてさらに隣の車両に突入する。

「分かつたら大きな声を出すな。次の駅で降りるぞ」「はあ！？ 降りるって・・・？」
「つち、このバカが」
「わ・・・！」

うつかり上げそうになる悲鳴を、俺は必死で飲み込んだ。だつてだ

つてこいつの手ー

人のお尻触つてるつて！

「見たまんま軽いな。何食つてんだ」

軽々俺を肩に担ぎ上げると、兄ちゃんは俺が逃げ出せないよう膝の裏と腰の下・・・お尻の辺りをがつちり押さえてそのままなんづん、車両を通過していく。

「ー」の痴漢男！」とでも罵つてやりたい気持ちは山々だつたけど、悲しいかな今俺は男へと身をやつした人間。そんな文句を言おうものなら気持ち悪がられるか、下手したら男装がバレてしまう。てか、こんなカツコで移動してる方がよっぽど人目に行くと思つんだけど。

「皆寝てる。声さえ立てなきや氛づかねえよ

・・・ああそう。案外ちゃんと人の話聞いてるんだね。

低く、ゆっくりと吐き出された声に俺も少しだけ落ち着きを取り戻す。

こんな格好で落ち着くつていうのも変な話だけじ。

「・・・次の駅で降りるつて、なんで？　降りてどうすんの？」
「それは降りてから話す」

ふうん。

俺は抵抗する意思を手放し、兄ちゃんの肩にぶら下がるマグロに成り下がつた。

これがただの誘拐魔とかなら死んでも暴れぬくなきやならないところだけど、どうもそういう感じじやないと俺には感じられた。

話の流れとかやり方とか、ただそれのが目的ならこんな風に回りくどいことはしないだろ？

俺の力バンが無くなつた経緯も、この人はどうやら知つていてうだし。

それに降りたら理由も話すつて言つてる

・・・でも万が一本当にやばやつだつたら大声出して駅長室に駆け込もう。

そつ心に決め、俺は浜松の駅に降り立つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045y/>

男子高生のつくりかた

2011年11月30日20時57分発行